

## P4-3 訪問看護ステーションにて介入内容を「可視化」したことで 作業療法士の職域が拡大できた取り組み ～入浴に対する短期集中的な介入を通して～

○末吉 謙斗(OT), 岡 沙弥乃(OT)

特定医療法人公仁会 明石仁十病院 訪問看護ステーション

Key word : 訪問作業療法, 環境整備, 管理運営

**【はじめに】**当訪問看護ステーション(以下, 訪看 st)では, 立ち上げ当初より作業療法士(以下, OTR)も関わっていたが, 訪看 st 管理者(以下, 管理者)や看護師における OTR の職域に関する認知度は低い状態にあった。また OTR への介入依頼内容は「身体機能の維持・向上」がほとんどであり, 管理者や看護師からは「何が出来るのかがわからない」「理学療法士との違いがわからない」との意見も挙がっていた。今後, 当法人内で地域分野での勤務・活動を続けていくためには, 管理者や看護スタッフの作業療法に対する知識や理解が必要であると考えた結果, 介入内容を「可視化」する取り組みを行った。取り組み後, OTR に対する介入依頼内容が多様化され, 訪看 st における OTR の職域が拡大した。今回は「可視化」に向けた様々な取り組みの内, 入浴に関する内容を中心に経過と結果を示す。利用者及び管理者に発表の許可は頂いている。

**【方法・経過】**まずは看護師に, 医療保険を用いて入浴介助を行っている利用者宅への同行を依頼。次に許可を頂けた利用者に対し, 1~2回程度の短期間での介入を通して種々の評価を行った後, 看護師と情報交換を行い, 必要に応じて動作自立に向けた環境調整や介助方法への助言・提案を実施。その際, 可視化への取り組みとして「介入場面をみてもらう」「評価結果や提案内容を図や写真を用いて用紙にまとめる」ことを行った。その結果, 看護師からは, 「私たちとは違う視点で評価している」「OTR の評価の視点は訪問では必要」との発言があり, 更に介入した利用者は看護師による介入が不必要な状態となった。その後同様の介入を数件行い, 訪看 st 事務所内で管理者や看護師に対し, 「OTR の介入効果」や「介入時における看護師・介護士との視点の違い」について事例報告を通して提示。その結果, 管理者は OTR 及び作業療法に関して興味を抱くようになり, 管理者自ら理

学療法士との違いを調べたり, OTR の介入現場に同行したり, 新規利用者受付時に OTR の介入を提案して頂けるようになった。しかし利用者や家族からは「体は元気だからリハビリは今のところ必要無い」、ケアマネジャーからは「必要性はわかるが, 定期的な介入による金銭的負担増」との理由で介入を拒否されるケースも目立った。その際, 管理者は利用者・家族に対して「OTR は体だけでなく認知機能や精神面のサポート, 活動支援や住環境調整等も可能」と説明し, ケアマネジャーに対しては「当訪看 st の OTR は終了を前提とした1~3回程度の短期集中的な介入も可能」と提案するなど, 積極的な OTR の活用を検討して頂けるようになった。

**【結果】**当訪看 st の2018年1月から12月における OTR が担当した新規・再開利用者, 全50件の内, 「身体機能維持・向上」を目的とした介入は12件で, 「入浴動作評価・介入」が18件, 「環境調整」が7件, 「外出支援」と「認知症の方への支援」が5件ずつ, 「がんのターミナル」が3件と介入依頼内容が多様化された。

**【考察】**訪問での介入の場合, 介入場所が利用者宅である為, 実施内容が他者に伝わりにくい環境にある。今回の取り組みにおいて, 作業療法を「可視化」出来たことが, 当訪看 st における OTR の職域拡大に繋がったと考えられる。また, 介入依頼内容が多様化した要因としては, 管理者が作業療法に関して, 利用者やケアマネジャー等に「環境面へのアプローチ」や「短期集中的な関わりも可能」といった説明が出来る程度の知識や情報を得ることが出来たからだと考ええる。

**【終わりに】**事例報告や取り組みを通して作業療法を「可視化」することは, 自身の職場や活動場所での職域を拡大させる1つの手段であると感じてきた。